

俺の青春ラブコメはこうだった

橘 夜葉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちは、こんばんは 橘 結衣です。

駄文です。何かありましたら感想をお願いします。

原作とすこし違います。

目次

第1話	The eternal love	1
第2話	されど人は醜くなる	3
3話	信用できないやつに限って目を見ない。	6
4話	暑い時は涼しいのが1番	9
5話	恨みは廻り廻り自分に	13
6話	恨む奴ほど自分に非がある	16
7話	脳内は快適だろうな	20
8話	人は 他人に暴力を振るい 自分を優位性を確かめる	23
9話	都合のいい事は常に周りからは都合の悪いこと	25
10話	皆同じだって? 違うだろ	28
11話	周りは全て敵だってことも十分あり得る	30
12話	たそがれ	33
13話	人ってかなり変わってるよな	35
14話	鬱病になった貴方は?	37
15	雨の音	39
16話	人とは	41
17話	人の表情は様々なものが見える	43
18話	なんか自分だけ違うとか言ってるけど、貴方浮いてるよ	45

第1話 The eternal love

第1話

5月5日

比企谷「……朝か 学校行きたくないな、朝飯食うか……」

比企谷「おはよう、愛しのまいしすたー(棒)」

目を擦りながらそう言うときが愛しの妹はキッチンにたち鼻歌を歌いながら朝ごはんを作っていた。

小町「おはよーごみいちゃん何時も棒読みだね」

比企谷「あーそうだな」

八幡脳内「そりや彼女がいればこうも心を込めて言えないんだよな……、かと言って小町に彼女ができた話をすればややこしくなるし……」

(小町) お兄ちゃん何であんな顔してるんだろう……

比企谷「飯食ったらさっさと学校行くぞ」

小町「了解であります! (・ω・)」

(比企谷) いつもテンション高いな

ああ暑い……なんで5月なのにこんなに暑いだよ……

比企谷「それで、なんで小町さん? 自転車に乗ってるのかしら?」

小町「お兄ちゃん……気持ち悪いよ……」

……泣

比企谷「何、学校送ればいいのか?」

小町「そうであります! 小町が後ろに乗ってれば車とかどこから出て来るか分かるでしょ?」

(比企谷八幡) おい……目が腐っても車ぐらい判別できるぞ……

比企谷「はあ……じゃ行くか、ちゃんと掴まってるよ」

小町「はい!」

「比企谷」 あぢい…… 後ろの小町乗せてるから余計にこがないと行けないし体力も使う……

比企谷「うお（グラ）」

小町わつ、お兄ちゃん大丈夫？小町乗ってるんだから事故起こさないですよ？」

（比企谷）俺一人ならいいのかよ

比企谷「ふうやつと送れた…さて行くか…」

遡ること約1ヶ月、4月1日高校生中学生なら分かるはず、sou！（爽）入学式だ、中学ではほぼ誰とも話さずぼっちを貫いてきた…泣 だからこそ誰も進学してない高校に受験したんだが…

テンションが高くなり少し早めに出てしまった…

別に普通に通学すれば何も起きるはずは無い、だが学校にもう少しで着く前に交差点で待っていたらいきなり犬が飛び出した、体が勝手に動いて犬を抱き上げてしまったが、もう時すでに遅し（お寿司）時間が止まったように走馬灯のようなものが頭をよぎった。

比企谷「ここで死ぬのか…」

の数秒後、その周辺に物凄い音が響いた

「ああ血がでてる…頭クラクラする、体がだるい…」

視点少し横にずらすと犬はちゃんと犬の飼い主の元に行ったが…おいどこ行くんだよ、クソが逃げやがった…。

そこから記憶が無い、でもそれが出会いの始まりだった。

第1話完結

y. Look forward to the next story

第2話 されど人は醜くなる

比企谷「はあ着いたか…。まだ朝なのに、なんでこんなに暑いんだ」
下駄箱に靴を入れ、いつもの様に教室に入る、すぐ様机にうつ伏せ、
なんでかって？だって目を合わないし、もし話しかけられても寝てる
ふりできる、最高だろ。

後であいつにも顔見せに行くか…

キンコンカン「2年C組 比企谷八幡、昼休みに国語科担当平塚
静まで来るように（怒）」

（比企谷）???なんかやっつけたっけ？

いつもの様に適当に授業を聞いた

平塚先生なんで眉間にしわ寄せてるんだ…

ー昼休みー

（比企谷）さて…。職員室でも行くかな、平塚先生場所言っでなかった
けど居るだろ…

「失礼します、2年C組比企谷八幡です 平塚先生いますか？」

「おお来たか比企谷、こっちに来てくれ」

「うす」

「それで、これはなんだ？」

「何って作文用紙ですよね？ぼけました？」

先生もついにポケ始めたのか…

「そういう事を言っでない!!この作文用紙に書かれている内容につい
て聞いているんだ!」

「えーと、確か高校生活を振り返ってですよね？」

（比企谷）普通に書いたんだけどな…

「それじゃ何故このような文になるんだ？」

「と言われても俺事故でクラスにも馴染めなくてクラスのやつとなん
か物拾ってくらいしか言われたことないんですよ、それを振り返って
ても書くことなんかたかが知れますよ。」

「そ、そうか…。それは済まない、だがこれは再提出だ」

(比企谷) おい、嘘だろ魔法少女ちゃんあみ見る時間削って書いたんだぞ、所要時間なんて3時間、3時間の結晶がたった一言で消されるのか…

「まじすか… それ結構時間掛かったんですよ?」

「意義は認めん、分全てを訂正して持ってこい、適当に綺麗事描いてい
いから、分かったな?」

「分かりました…」

「あと君には奉仕活動を任せよう、その腐った目、物事の考え方を奉仕
活動で見出してこい」

「せ、先生、俺 ヘルカス? そうヘルカスなんですよ」

「ヘルニアな… はあ大丈夫力仕事ではない、時間も無いし放課後ま
た職員室に来てくれ」

おい先生ここでタバコ吸わないでくれよ… しかもその灰皿どう
した… I a m h e a l t h y って書いてあるぞ、嘘だろ真逆
だろ…

「分かりました」

――放課後――

(比企谷) さて、行くか… てか何回も職員室行きたくないんだよ
な…

歩いてると愛しの人が歩いていた

「よお、○○○」

「あら、八幡どうしたの? 放課後でしょ? 帰らないの?」

いつも変わらずだな…

「おう、今から職員室なんだよ、なんでも奉仕活動? ってのやるんだと
よ」

(比企谷) ん? 今ピクつとしたな…

??? 「そ、そう… ふふもしかしたら今日はいい事あるかもしれない
わね」

(比企谷) ? いい事? まさか… …… うん、あれだな

いやでも、奉仕活動でいい事か… だよなあ

??? 「どうしたの？」

比企谷「いや、何でもないそれじゃ職員室行ってくるわ」
歩きながらそう言った、後ろから微かに聞こえた

??? 「また、後で八幡」

――職員室――

比企谷「失礼します、比企谷です」

平塚「お、サボらす来たな、では行こうか」

(比企谷) すぐ行くのね…

まだ5月という事もあり日が直ぐ落ちる

外ではキャツキヤと生徒の甲高い声が聞こえる…

無音の廊下を歩く… ヒールの音を立てながら

平塚「ここだ 入るぞ」

(比企谷) おいおいノック無しかよ…

??? 「先生、ノックを…」

(比企谷) ん、聞きなれた声が…

比企谷「失礼します」

入った瞬間目が合った 雪乃!?

比企谷「雪乃!?!」

??? 「やつと来たのね、八幡」

(比企谷) 全て分かったように言うな…

Wait for the next

3話 信用できないやつに限って目を見ない。

八幡「それで、なんで雪乃はここに居るんだ？」

八幡「こんな何も無い教室に何も無いのに……何かあったのか？」

雪ノ下「だって、こK」

平塚「それは私から説明しよう、比企谷、君にはここで奉仕活動をして貰う……無論、強制でだ」

八幡「別に構いませんけど、雪ノ下と二人ですか？」

平塚「そうなるな、と言つても奉仕活動ならぬお悩み相談室みたいな考えで大丈夫だ、基本私が相談者を呼ぶ、比企谷達が悩みを聞いてやってやれ、別に比企谷達が相談者を探しても大丈夫だからな、(にやにや)」

八幡「別に自分から探しに行きませんよ(溜息)」

平塚「そうか……まあそれならそれでいい、比企谷1つ聞きたいことあるんだか大丈夫か？それと同窓会ではなく部活だから入部という事になるからな」

雪ノ下「その前に先生1つ質問が」

平塚「なんだ？」

雪ノ下「何故、は………比企谷君が入部何ですか？」

平塚「比企谷のその腐った目や人を馬鹿にする心、これを奉仕部で直してもらいたくてな、それと作文の罰でもある。」

八幡(作文まだ根に持ってたのかよ……)

雪ノ下「成程……そのような理由が……ですが比企谷君は目は腐ってますけど、人を思いやったり暖かい心を持っています」

平塚「どちらにしても、比企谷が入部するのは確定だこれを気に仲良くしてくれ」

比企谷「先生それで質問とは？」

平塚「あ？ああいやさつき比企谷が雪ノ下の事を下の名前で呼んでいたからな、それが気になってな」

比企谷「まあ毎日会っていますからね」

平塚「……比企谷もしかして」

比企谷「どうしました?」

平塚「雪ノ下と結構親密な関係なのか?」

比企谷「あー(ちら)」

雪ノ下(言ってもいいんじゃないかしら) 目線

比企谷(分かった…)

比企谷「一応雪ノ下したとは付き合ってますよ、それがどうかしましたか?」

平塚「い、いや何でもないおめでどう…」

比企谷「有難うございます…」

平塚「では頑張ってくれ私は職員室に戻る相談者が来たらちゃんと相談にのってくれ」

比企谷・雪ノ下「分かりました」

雪ノ下「こほん、八幡紅茶飲む?」

八幡「あ、ああ」

雪ノ下「ね、ねえ八幡?」

比企谷「どした?」

雪ノ下「隣座つてもいいかしら?」

八幡(積極的だな… 嬉しい限りです!!)

比企谷「いいぞ」

ちよこん

雪ノ下「……………」

比企谷「どした?」

雪ノ下「先生いい加減出てきたらどうですか?怒」

八幡(え、嘘でしょ隠れたの… マジかよ先生)

平塚「わ、悪いな、比企谷達が節度な交際してるか気になつてな」

雪ノ下「帰ってください!」

比企谷(かなりきつく言うな…)

平塚「悪かった、失礼する」

しよんぼりしながらドアを締めていった

数秒後にはコツコツとヒールの音が扉越しから聞こえた

比企谷「もうこんな時間か…。どうする雪ノ下下向時間までもうすぐだし紅茶飲んだら帰らないか？」

雪ノ下「そうね」そわそわ

チラチラしながら比企谷の顔を見る

比企谷「どした？」

雪ノ下「今日私のご飯食べてかないかしら？」

比企谷（本当に積極的だな……………嬉しいです！）

比企谷「いいぞ、食材とかはあるのか？無いなら買いに行かないか？」

雪ノ下「そうね…。ちようど少なくなってきたし買いに行きましようか」

比企谷「分かった、それじゃもうそろしたら教室出るか」

雪ノ下「ええ」

3 話完結

4話 暑い時は涼しいのが1番

――幕張スーパー――

作者（スーパーに行くまでの話は割愛します）

比企谷「それで、何作るんだ？今年何故か暑いからさっぱりしたのが食べたいんだか…」

雪ノ下「そうね…ハンバーグとかはどう？」

比企谷「ね、ねえ今俺の話聞いてた？さっP」

雪ノ下「ハンバーグで良いわよね？怒」

比企谷「はい」

辺りを見てみると時間帯なのか親子連れが多く居る

すこし注目すると、子供が親にねだっていたり

子供が親と一緒に笑って買い物してるのが

良く見えた。

雪ノ下「ああいうの憧れるわね」

比企谷（珍しいな…）

比企谷「そうだな、なあマッ缶買ってもいいか？」

雪ノ下「貴方またそれを飲むのね…良いわよ次いでに私のもカゴ

に入れて置いて」

比企谷「あいよ」

――スーパーレジにて――

店員「お会計5673円になります。」

雪ノ下「はい」

比企谷「おいちよつとまで、お金は俺が出す、てかなんで自然に出してるんだよ」

雪ノ下「そうかしら？別に私の家で料理するんだし、余った食材や買った食材は私が使うのよ？私がお金払うのは普通なんじゃないかしら？」

比企谷「うん、面倒いから俺出すわ、てか男にこんくらいさしてくれ逆に恥ずかしいわ…」

雪ノ下「そ、そう？ならお言葉に甘えて」

―――帰路―――

比企谷「そんで本当にハンバーグにするの？」

雪ノ下「ええ一応はそうするつもりよ、ちょうどデミグラスソースも作ってみたかったの」

比企谷「そうか、分かった」

比企谷（デミグラスソース作りたからハンバーグにしたのか：：
案外理由は安直だな：：」

―――雪ノ下家にて―――

雪ノ下「それで、結局犬の飼い主からなんかアクションはあったの？」もぐもぐ

比企谷「いや、なんの音沙汰もなし、なんか菓子折りとか挨拶の1つも無い、相手の親からは電話きたけど 言い訳じみた話し方だし具合が悪いと言ってすぐ切ったわ、別に相手の所在も分かってるし」

雪ノ下「へえ、それって何かしようと思ってるのかしら？」

比企谷「いや、その相手が俺達の高校に居るらしいし学年も同じらしいだつてよ」

雪ノ下「へえ名前は？」

比企谷「由比ヶ浜 結衣だつてよ」

雪ノ下「由比ヶ浜結衣：：ねいずれ話せればいいけど」

比企谷「いずれ何かあるだろ、ご馳走さん」

雪ノ下「お粗末様でした」

比企谷「そんじゃ俺は帰るわ、明日また学校でな」

雪ノ下「ええまた明日：： 由比ヶ浜：： ね、変な事起きなければいいけど：：」

―――翌朝―――

比企谷「はあぁー：： 学校行くか」

比企谷「おはよう小町」

小町「おはようーそういえばさお兄ちゃん、また由比ヶ浜？つて人の電話番号の人から着信来てたよ？」

比企谷「執拗いな：： 着信拒否しとけ」

小町「あいあいさー」

比企谷「そんじや俺先に学校行くわ、小町も早く家出ろよ」

小町「あいさー(怠)」

ー学校ー

比企谷「つても早く学校来てもやることないんだよな… 少し外の空気でも吸いに行くかな…」

ー学校内 テニスコート付近ー

比企谷「やつぱここが1番安心するよなー涼しいし誰も来ないし最高だわ」

鼻から息を吸ってゆっくりしていると遠くからボーふが跳ねる音が聞こえる、この時間テニスコートではテニス部が練習をしていた

比企谷「ん、テニスか…」

??? 「すいませーん、ボール拾ってくださいますか？」

比企谷「ああ、ほれ」

??? 「有難うございます… って比企谷君?!」

比企谷「えーと誰かな？」

??? 「あはは、分からないか同じクラスの戸塚彩加だよ？」

比企谷「戸塚か悪い同じクラスのやつは名前覚えてなくてな特に女子はもつと分からないんだ」

戸塚「あはは… 一応男子なんだけどな… って何でも比企谷君はここに居るの？」

比企谷「いや クラス行ってもやる事ないし、暑いからな少し涼みに来たんだよ」

戸塚「そうなんだ、でももう少しでチャイムなるよ？」

比企谷「え、ホント!? うわっホントだ、それじやまたな戸塚クラスで!!」

戸塚「早い… あれ?そこに居るのは…」

由比ヶ浜「やつはろー戸塚君ーさつき誰と話していたの？」

戸塚(なんだろう?この威圧感は…)

戸塚「え、えーと比企谷君だよ？同じクラスの」

由比ヶ浜「え、ヒツキーと話していたの？えーもう少し早く来てれば…」

戸塚「あはは…遅かったね、そのヒツキーって奴は誰なのかな？」

由比ヶ浜「ヒツキーはヒツキーだよ!!!」

戸塚「それは比企谷君のことかな？ちよつと失礼じゃない？」

由比ヶ浜「そうかなー？引きこもりぽいからヒツキーって名前付けたんだよ…わ！もうチャイムなるじゃあね戸塚君ー」

たつて数秒、数分の出来事なのに由比ヶ浜にはすこし恐怖を覚えた…

戸塚「なんだろう…あの目何も起きなければいいけど…」

第4話 完結

5話 恨みは廻り廻り自分に

――由比ヶ浜宅――

由比ヶ浜「うう ぐす なんで… なんでなんでなんでなんで」
部屋に明かりもつけず 1人で独り言をブツブツと話す
目には光がなく 第三者からみると変質者あるいは

―精神異常―に見える

由比ヶ浜「悪くない悪くないあれは飛び出したのが悪い」
1ヶ月ほど前

由比ヶ浜「はっはっはっサブレ行くよ！」

サブレ「わん！」

――信号前――

由比ヶ浜「結構走ったな―少しやすも… ああ眠い…」

ふあー…！サブレ!?」

朝早く起きた事もあり走った疲れでウトウトしていたら
リードが取れていた… 由比ヶ浜が気づいた時には、サブレが車道
を反対側に走っているのが見えた

由比ヶ浜「あ…」

手を伸ばしたが当然 届く訳でもなくて

数秒後 ドン！と鈍い音が近くには響き 反射的に、いや或いは現
実を認めなくて目を閉じていた。

声が聞こえてきて、目を開けて見たら、黒い車と同じ制服を着た男
子が血だらけになり 倒れていた。

由比ヶ浜「ああ何で何でも 私は… 悪くない… 悪くない」

自分に言い聞かせるように同じ言葉を連呼してた

サブレは私に気づいたのか此方に歩いて戻ってきた
直ぐに男子に所に救護しようとしたが

近くには … ガソリンの匂い 血の匂い

余りに酷く 目を背けたくなるほど 何故か 興奮と恐怖が脳を
支配した

由比ヶ浜の中では怖くて足が興奮か恐怖のせいかな この場所から

走った、怖くて

——由比ヶ浜宅——

あの後由比ヶ浜はあの近くを通らなくなった

由比ヶ浜（もしかしたらあの人が死んでしまったのかな… どうしようのせい… いやあれは飛び出したのが悪い… そう…

由比ヶ浜母「はい？ 由比ヶ浜ですが…」

千葉警察署「もしもし、私千葉警察署交通課交通捜査係担当の 飯田と 申します」

由比ヶ浜母「はあ… そして家に何かようですか？」

飯田「はい、お宅の家族で最近人身事故等を見てませんでしょうか？」

由比ヶ浜母「いえ… そのような話は家族からは聞いてないですが…」

飯田「そうですか、少しお話があるので明日の12時娘さんと一緒に千葉警察署に来てください。

由比ヶ浜母「はい… 娘も必ずですか？」

飯田「必ずです、では失礼します。」

ガチャ

由比ヶ浜母「結衣——降りてきなさい!!!」

由比ヶ浜「どうしたの？」

由比ヶ浜母「結衣明日警察署いくよ、理由はわかるわよね？」

由比ヶ浜「っっ！はい…」

由比ヶ浜母「もう寝なさい、明日は学校休みにするから」

由比ヶ浜「… はい」

翌日

——千葉警察署——

飯田「お越し頂き有難うございます、隣に居るのは同僚の桜咲です、それと、こちらと貴方達の意見が食い違わないように録音機を置かしてもらいます。」

由比ヶ浜母「はい… それでお話とは？」

飯田「えーと由比ヶ浜 結衣さん？ ですね、この写真見覚えありま

すか？」

見せられたのは由比ヶ浜が怖くて棒立ちしその目先には男性が横に倒れていた写真であった

由比ヶ浜「はい……」

飯田「お母様少し席を外してもらいますか？二時間ほどで終わります。」

由比ヶ浜母「はい」

その後は、あの場で何があったかそして日時 場所 何時何分に何が起こったかを細かく聞かれた

それからの記憶はない

あれから聞かされたが 示談になったそうだが、幾らかは聞いてない……

母親にお見舞いしてきなさいと、言われたが 適当に返事をして行かなかった……

だって 悪くないから

5話完結

6話 恨む奴ほど自分に非がある

――奉仕部部室――

雪ノ下「八幡、紅茶どうぞ」

手馴れた作業で自然に渡す

比企谷「ああ有難う・・・ 美味しいな・・・」

雪ノ下「有難う・・・」

・・・話題もなく沈黙する2人

比企谷（暇だな・・・）

ガラガラ

平塚「失礼するぞ」

雪ノ下「先生、ノックを・・・」

平塚「すまない・・・」

雪ノ下「先生、それで何か用ですか？」

雪ノ下（女子生徒？相談者かしら・・・）

平塚「そうだ！相談者だ、話しを聞いてやってくれ」

由比ヶ浜「し、失礼しまさってヒツキー!？」

比企谷「誰だ、お前に変なあだ名つけられるほど仲良くないんだか、

このクソビッチが」

由比ヶ浜「はあっヒツキーキモイ！死ね！」

比企谷（沸点低いな）

雪ノ下「由比ヶ浜結衣さんね、どうぞ座って」

雪ノ下（この人が・・・ 由比ヶ浜さんね・・・ さあてどうしましょう

か）

平塚「では私は失礼するよ、頑張れよー」

比企谷・雪ノ下「はい」

比企谷「それで名前は？」

さっきのあだ名で少し不満を持ち、不手癖ながら聞く

由比ヶ浜「由比ヶ浜結衣だよー☆」

比企谷「!？」

場に冷たい空気が流れる・・・ 何故か？事故の原因を作りお見舞い

にも来ず、現場から逃げた 奴が居るからだ…

比企谷「そ、そうか… 名前か… 俺も言うか

比企谷八幡だ

由比ヶ浜 帰れ」

由比ヶ浜「何で!？」

雪ノ下「この人頭の中空っぽなのかしら…」

比企谷「何故かって? 言わなくても分かるはずだか?」

少しキレそうになるのを抑えながら由比ヶ浜の目を見て話す

由比ヶ浜「あーあれね事故でしょ? あの時うちのサブレがごめんね」

まるで心に籠ってない 謝罪 笑いながら まるでこの場の空気を無くすために笑いながら

雪ノ下「貴方 … 少し大丈夫かしら? 貴方の犬が道路に入ったから八幡が事故を起こしたのよ? しかもその後も救護活動もせず お見舞いにも来ず、よくそんな顔でこのうと心のない謝罪が出来るわね」

比企谷「事故の件は学校に連絡されてないのか…」

由比ヶ浜「それは… まず私のせいじゃない! サブレが逃げたのも悪くない、あの時サブレが飛び出しても車は止まってた! だから飛び出したヒツキーが悪いんだよ!」

比企谷「おー成程ね、そんじやまず1つサブレが逃げたのが悪くないと? どう考えてもお前が悪いだろ保護者の責任だ、それともう1つサブレが飛び出してたらまず即死だろうな、だってな法定速度で走ってた車に急に飛び出してたら車が止まれるか? 普通に考えて無理だろ?」

雪ノ下「貴方1回常識を学んだ方がいいわよ、とにかく座りなさい」

由比ヶ浜「う、うん それで相談事なんだけど…」

雪ノ下・比企谷「無理」

由比ヶ浜「なんで!？」

…

比企谷「先生呼ぶわ話にならん」

雪ノ下「そうね、八幡呼んできてくれる？」

比企谷「言われなくてもそうつもりだったよ雪乃」
ガラガラ

雪ノ下「それで、は、比企谷君に謝る気は無いの？」

由比ヶ浜「ないよ？なんで？だって悪くないから、てゆうか雪ノ下さんってなんなの？ヒツキーの彼女なの？下の名前で読んでいるけど。」

雪ノ下「そうよ？付き合っているけど何か悪い？貴方に関係無いでしょ？」

由

比ヶ

浜

「.....」

〇〇」

数秒沈黙した後 雪ノ下に聞こえないように独り言のように呟く.....

雪ノ下「まず比企谷君に謝罪しなさい、それからよ相談はまあ許してくれないでしょうね、貴方は逃げたんですし」

ぶち

――職員室――

比企谷「失礼します、比企谷です、平塚先生居ますか？」

平塚「おおどうした？もう終わったのか？」

比企谷「兎に角、事情は由比ヶ浜を含めて話します、奉仕部に来てください」

平塚「？分かった」

――奉仕部――

アハハ

7話 脳内は快適だろうか

――廊下――

比企谷「平塚先生は知ってて由比ヶ浜を奉仕部に呼んだんですか？」

多少イラつきながら 少し煽る様に聞いてみる

平塚「なんの事だ？なんだ、由比ヶ浜と前から接点あったのか？」

比企谷（まじかよ）

比企谷「もういいです、兎に角奉仕部に行きましょう」

平塚（??）

平塚「ああ」

――奉仕部部室――

比企谷（静か過ぎる…）

比企谷「ゆきn……………はっ？何してんだよ雪乃…」

比企谷（よく見ると頬が少し赤い…何かあったのか）

雪ノ下「何って由比ヶ浜さんがいきなり殴って来たのよ、まあ私は柔道を少しやってたから大丈夫だけど… 由比ヶ浜さん力凄いわね」

椅子には由比ヶ浜がカーテンで縛られている…

平塚「由比ヶ浜、職員室来い話を聞く」

由比ヶ浜「あはは、皆いいよね、何もかもうまくいって、全部無くなれば良いのに、ふう… ヒッキーまた明日ね。」

平塚「君達は引き続き部活動をしてってくれ由比ヶ浜の処分は明日話す、では。」

……………

――奉仕部――

比企谷「なんだあの目… さつきまであんなだったか？」

雪ノ下「いや、八幡と付き合ってる話をしたら、凄い豹変して…いきなり笑いだして」

比企谷「それで殴られたか…」

分かったように落ち着いて話す比企谷

雪ノ下「ええ、とても怖かった… 笑ってたし、目の焦点がグルグル回ってた…」

比企谷「想像もしたくねえな… 今日泊まるか？」

雪ノ下「ええ怖いし泊まって行くわ、小町さんに何が食べたいか聞いておいて？」

比企谷「あいよ、帰りスーパー寄るか」

結局小町に聞いてシュチューにすることになった…

ー比企谷宅にてー

比企谷「もしもし、比企谷です、はいはい今日は泊まって行くそうです、ええあと少し折り入って話があるので近いうちに雪乃と其方に行きますね、はい失礼します。」

比企谷「雪乃ー近いうちにあの人のところ行くからな」

雪ノ下「理由はあるの？」

比企谷「由比ヶ浜の件とか部活の件で話すことも沢山あるだろ？」

比企谷「兎に角行くことは決定だ電話もしてしまったし」

雪ノ下「分かったわ、たまには話さないかね…」

比企谷「寝るか… 雪乃」

雪ノ下「ええ…」

何があつたかは皆さんの想像にお任せします（作者）

5時間ほど前…

ー職員室ー

平塚「なんで雪ノ下を叩いたんだ？理由があるんだろう？」

由比ヶ浜「理由？ヒツキーと付き合ってるからだよ！あんな根暗と付き合ってるんだよ！ヒツキーもキモいしゆきのんも！」

平塚「… 親に電話するからそこで座ってる」

平塚「なんだあの目…」
7話 完結

8話 人は 他人に暴力を振るい 自分を優位性を
確かめる

――職員室前 生徒指導室――

平塚「それで 何で 雪ノ下に手を出したんだ？喧嘩でもしたのか？由比ヶ浜が流石に手を出すとは些か…」

平塚（完全に落ち度だったな…書類に目を通してあげれば良かった… えばあの時 事故の被害者で雪ノ下家族から書類を渡されていたのを忘れていたな…）

チラ

平塚「由比ヶ浜 黙っていないで話してくれ、幸い 雪ノ下からは別に怒っていないそうだが理由を言ってくれないと警察にも相談しに行くと言ってる、出来る限りそのような事は阻止したいんだ、分かるだろ？」

由比ヶ浜「… カツとなって手を出してしまいました、それだけです」

平塚「… そうか 分かった細かいことは生徒指導主任に任せ、処分は数日後において言い渡される、それ迄は自宅で謹慎だ」

平塚（笑ってる…）

由比ヶ浜「はあい」

――数日後――

校長「1年C組 由比ヶ浜 結衣 同学年 雪ノ下雪乃の暴行によつて処分を言い渡す、反省の色が全く見えず 話にも全く聞かない

それらを踏まえ 由比ヶ浜結衣 を自宅謹慎2週間とする」

平塚（かなり長くなったな… 由比ヶ浜結局話をしなかったのか…）

由比ヶ浜「はい…」

――数日前――

比企谷「雪乃 大丈夫か？病院行くか？」

雪ノ下「別に大丈夫よ 少しヒリヒリするだけだし、それよりも、お

母さんの所に行かないと………八幡来てくれるわよね？」

比企谷「……はい」

雪ノ下「ではいきましようか。」

――雪ノ下宅――

……

雪花「それで、雪乃怪我は？して無いの？」

あの後雪ノ下宅について直ぐに母親に事件の内容を細かく話した、終始穏やかに微笑しなから聞いていた、

比企谷（全く……雪ノ下家は肝が据わってんな……）

雪乃「ええ大丈夫です、少しヒリヒリするだけで特に外傷はそれだけです。」

雪花「それで、八幡 貴方、雪乃の近くには居なかったの？」

比企谷「そこに関しては俺の落ち度だまさか由比ヶ浜が手を出すとは全く予想して無かった、雪花さんすいません。」

雪花「成程……分かったわ、八幡」

比企谷「はい……」

雪花「貴方雪乃の彼氏なら守ってあげなさいこちらも最大のサポートはするわ、いいわね？」

比企谷「分かりました……」

――数日後――

平塚「由比ヶ浜は体調不良で2週間程休むことになった」

比企谷（体調不良のていにしたのか……？視線を感じる）

葉山（比企谷……あいつ何か知っているな……あの時由比ヶ浜から話を聞いた時と……）

8話完結

9話 都合のいい事は常に周りからは都合の悪いこと

ー教室ー休み時間ー

比企谷「眠…」

葉山「ヒキタ二君？ちよつといいかな？」

顔を覗くように比企谷を見る

だかその目は落ち着きがなく 何かに怒る様な目をしていた

比企谷「うあ？あーやだ」

葉山「な、なんでだい？少しは聞きたいことがあってね」

流石に断られるとは思わず、間髪入れず拒否され

少し びつくりする

比企谷（… 此奴 由比ヶ浜達といつも居るやつだよな… だとするとやっぱり先日の暴行事件か）

葉山「本当に頼む！5分でもいい五分だけ聞いてくれ」

比企谷「Silent Hybrid I don't want to hear your story, can you read the air a little?」

葉山「英語？ごめん分からないんだ…」

比企谷「なら話すことは無い」

葉山は少し歯ぎしりをして睨む

葉山「放課後教室に来てくれ、それからは知らない 例えば…
ね？」

にやけながら また全てを捨てたような目をして比企谷を脅す

比企谷「Dung…」

比企谷（葉山… 確か雪ノ下建設の顧問弁護士だったよな…）

I'll take you to hell

ー放課後ー

葉山「来てくれたか！やっぱりヒキタ二君は話がわかるんだね！」

比企谷「能書きはいいさつさと話をしろ」

イラつきながら 面倒臭い様に葉山を見ながら問う

葉山「…… 由比ヶ浜の事だ…… 先日休む前日結衣と電話したんだ、ヒキタニ君と仲良くなりたいと その次の日いきなり休み、しかも電話してもなんでもないの一点張り」

比企谷「知らん」

比企谷（だつて本当にその場にいなかったしな）

葉山「成程…… 分かった、悪かった時間を取らせた」

もう比企谷が話気がないと思い 諦めた

比企谷「なあ確かお前の父親顧問弁護士だったよな？ 朝の脅しはちよつとやばくないか？」

葉山「なんのことでい？」

いつもの様に 薄っぺらい笑顔でとぼける

比企谷「そうか、お前はそうするしかないのか、ふうまあいい今日の夜樂しみだな」

葉山「？なんのことだい」

比企谷「なんでも、じゃあな」

――奉仕部部屋――

葉山と会う数分前

「放課後教室に来てくれ、それから知らない 例えば……
ね？」

比企谷「だそうかどうか思う？」

雪ノ下「脅しね、母に連絡するわ」

比企谷「Do it thoroughly」

雪ノ下「Leave it to me」

――葉山宅――

葉山父「はい 葉山です…… あ！雪ノ下さん！はいはい…… え、はい…… 申し訳ありません、はい分かりました…… 本当に申し訳ありません、はい失礼します」

葉山「お父さんどうしたんだい？そんな大きな声出して」

葉山父「何しらばつられてる!!お前は！お前雪ノ下さんの娘さんと彼氏さんを脅したんだな!?いま雪ノ下さんから連絡きた」

葉山「なんのことだい？そんなことしてないよ？」

葉山父「そうか・・・でもな録音を聞かされたんだよ、雪ノ下さんから伝言だ「今後一切雪ノ下雪乃に接近するな、した場合警察に録音と一緒に行く」だそうだ・・・何をしてくれる!？」

葉山「分かりました・・・」

ヒキタニか・・・

10話 皆同じだったって？違うだろ

――次の日―教室――

八幡（はあ今日も静かな日だん）
欠伸しながら机に突っ伏す

葉山「ちよつといいかな？」

八幡（…）何 こいつアホなのか前に雪花さんに言ってもらったのに、頭悪いのか…）

八幡「… 1分だ、1分だけ話を聞く」

葉山「有難う、と言っても話す事は一つだけだ」

葉山「君は、何故言ったんだ？」

八幡（ああバレてるのか… まあそりやなるわな）

八幡「何の話だ？」

葉山「そうか… 分かった」

八幡「へい、じゃあな」

もう返す言葉もなくて面倒臭くて適当に返事をする

――2週間後――

由比ヶ浜「失礼しまーす、平塚先生いますか？」

平塚「ああ、来たか 由比ヶ浜1つ言うがもう問題事は辞めてくれ。」

由比ヶ浜「はい」

平塚（謹慎もあったのに反省の色も落ち込むなどもない… 正直言って気色悪いな…）

――奉仕部――

雪ノ下「In the end, yuigahama has
been retired…」

比企谷「Yes… why do you speak in

English? Isn't it good in Ja

panesee?」

何故か英語で話す雪ノ下に率直な質問をする

雪ノ下「それもそうね、人前で話すこと以外は英語で話さなくても大丈夫のようね」

平塚「失礼するぞ、新しい入部者だ入ってくれ」

由比ヶ浜「失礼します、由比ヶ浜です！宜しくお願いしますー！…！ヒツキーいるの!?キモイ!!」

比企谷「平塚先生入部者って由比ヶ浜なんですね…」

雪ノ下「平塚先生入部させる前に普通の人の関わり方を教えて下さい、前回と会話が同じになりますよ」

呆れたように雪ノ下は言う

平塚先生は雪ノ下に近づき耳元で話しかける

平塚「教頭から由比ヶ浜の監視を任せられたんだ… 1番最適なのがこの奉仕部での入部なんだよ頼む！」

申し訳ないように苦笑いしながら話す

雪ノ下「構わないですが、もし由比ヶ浜が問題を起こしたら私と比企谷君が奉仕部を抜けるか由比ヶ浜を退部させてください、私は興味で奉仕部に居ることをお忘れなく」

平塚「ああ… 分かったそれでいい」

由比ヶ浜「何二人で話してるの!?気持ち悪い！」

比企谷「由比ヶ浜」

由比ヶ浜「な、なに！ヒツキー!」

比企谷に話しかけられ嬉しく犬のように反応する

顔がぱあーと明るくなるのが雪ノ下達からも読み取れる

比企谷「五月蠅いんだよ、黙ってくれないか？」

由比ヶ浜「な、何！ヒツキーキモイ!その目とか気持ち悪すぎ!」

雪ノ下「貴方身の程を弁えなさい、ただでさえ問題を起こした身なのよ、少しは自重しなさい、それと比企谷君は目は腐ってないわ」

由比ヶ浜「やっぱり… ヒツキーとゆきのさんって… クソが」

11話周りは全て敵だつてことも十分あり得る

あれから数日が経ち 少しは落ち着いた 雪乃はいいいつも通り八幡と話している

一方由比ヶ浜は比企ヶ谷を見ると 「キモい」等(以下略)している それに毎回雪ノ下が強く当たる

一見女の子同士が喧嘩していると思うが話を聞いていると明らかに由比ヶ浜が悪いのがハッキリ分かる

一方平塚先生と言うと。。。。

平塚「ハアー何故私があんな問題児の監視をしなきゃいけないんだ。。。まあ奉仕部があるからあれはあれはで監視ができるからいいか。。。」

平塚(だが、少いし危険だな実際雪ノ下と由比ヶ浜は口喧嘩をしているからな何か起きなければいいが。。。)

??「平塚先生大丈夫ですか?」

平塚先生がタバコを吸いながら空の空を見ていたが後ろから同じ女性の声が聞こえる

見た目はショートボブ男性が良く好む髪型だ

平塚「小鳥遊さん!居たんですか。。。」

最近学生としか話をしていなく少し精神的にきていた。。。

小鳥遊「ええ私も明日の授業の準備が終わったので少し息抜きを。。。」

微笑みながら話す

平塚「そうですね。。最近疲れますね数週間過ぎれば夏休みなので少しはリラククスできますよ泣」

タバコの灰を落としながら またため息をつきながら愚痴の様に話す

小鳥遊「ああそう言えばあと少しで夏休みですねーでも平塚先生つて部活のお顧問はやって無いですか?」

平塚(あ。。。そうだ私奉仕部の顧問やっている。。でもこれは周りの先生には内緒だった てか校長の認知されていない まあ

授業研究の一環で借りているし　まあバレないよね。。。)

平塚「いや　私は部活の顧問はやっていますし　夏休みは少しはゆつくり出来そうです」

さらつと嘘をつく　　まず奉仕部の存在がバレると平塚の出世にも響く

この嘘が後々面倒なことになる事は誰も予想していい無い。。。。。。

小鳥遊「平塚先生はどこか行くんですか？」

平塚「ええ　最近車買ったので　海とかにドライブに行こうかと思えます」

内心車は買ったが結局1人ドライブはどうしようか考えてた

隣に誰も座らないのに2ドアの車を買ったのは盲点だと思っていた

小鳥遊「お、それは彼氏さんでも出来たんですか？それは許せないですよ　笑」

小鳥遊（まさか平塚先生に彼氏さんが出来ていたとは。。。先を越されたのかな）

平塚「そんなわけないですよ汗　1人でドライブです。」

平塚（聞かれるよな。。。彼氏欲しいな。。。）

一方奉仕部では。。。。

比企ヶ谷「んで　なんで　あんたらは喧嘩しているの？何あんたらは喧嘩しないと生きていけないのか？」

今すぐにも溜息を付きたく呆れた声2人を見つめながら　真顔で語る

雪ノ下「だってこの人が八幡の事を悪く言うんだよ　怒るのは当たり前のことよ　それとも私が怒って八幡に何か不利益があるのかしら？」

少し息を途切れさせ　肩を揺らしながら　比企ヶ谷に語りかける

一方由比ヶ浜は　比企ヶ谷の意外な反応に少し戸惑っている

キヨロキヨロさせながら 話しかけるタイミングを まだか

と言う顔をしながら見ている

由比ヶ浜「だって 悪い事は言っていないもんヒツキーキモすぎなん
ですけど笑」

比企ヶ谷（なんかこのセリフも聞き飽きたな だって同じセリ
フを何回も聞かされたら飽きるよ ソースは俺 昔妹の小町
にアニメの再放送が決まって 何回もその事を言っって小町に一回マ
ジな顔で 「ひっこいよ？そろそろうざい」と真顔で言われ少しメン
タルが尽きた
あ アニメ見て復活しま
した」

30分後

学校アナウンス「下校時間になりました校内に居る生徒は窓等を閉
め下校をして下さい。」

比企ヶ谷「ふーさてと。。。。おい いつまでっやっていもう帰るぞ
雪乃準備しろ」

雪ノ下に言うのも疲れ普段通り 帰る事だけを言った
雪ノ下「わかったわ」

これから話は大きく変わる 刮目せよ

12話たそがれ

比企ヶ谷「それで今回はなんで喧嘩していたんだ？」

毎度同じ事を当たり前の様に聞く

雪ノ下「あの人八幡の事を悪く言ったの　彼女として黙って居られないわ。」

えっへんと聞こえる様にドヤ顔で話す雪ノ下である

比企ヶ谷「まあ実際聴いてていい気分では無いからな、そこに関しては特に大丈夫だ・・・だが話し方だ由比ヶ浜とは過去に一回謹慎を受けているんだよ　何をするかは分からない　過剰に煽ったりするのはやめてくれ」

比企ヶ谷「解ったな？」

指を指して　念を指す　これも比企ヶ谷優しさであり　愛情表現でもある

雪ノ下「分かったわ　だからそんな怖い顔しないで　あと眼。。。」

子供を叱る母親の様に比企ヶ谷の眼を言及する

比企ヶ谷「おっとそれは悪い最近治って治ってきたんだけどな」

比企ヶ谷「それで今日の飯はなんなんだ？」

ここ最近色々変化が沢山あった例えば夜飯は雪ノ下の家で食うことが多くなつた

泊まりもかなりの頻度で増えた　母親は基本家にいないが一応訳は話した

数週間前・・・

八幡「なあこれかr偶に家に帰ることなくなるかもしれないから」

比企ヶ谷母「なんで??家飽きたの?」

八幡「いや　　そううわけではなく　普通に友達の家に止まる事が多くなる」

比企ヶ谷「成程ね・・・分かったわ」

比企ヶ谷（今考えると良くすぐ話が通したよな・・・）」

雪ノ下「今日はオムライスよ 動画サイトでふわふわな作り方を見たのよ」

比企ケ谷「おおそれは楽しみだな・・・それでコンビニは寄るか？家にまだあったっけ？」

雪ノ下「え、ええ 有るわよ でも今日もするの？私は大丈夫だけど八幡は大丈夫？」

それは勿論コから始まりムで終わるものだ 何故か雪ノ下はかなりの精力の持ち主で一回で2、3回はするその為あれはすぐ無くなることも多々ある

比企ケ谷「逆に俺がしたい」

雪ノ下「そ、そう八幡が大丈夫なら私は大丈夫よ」
帰宅中・・・・・・・・・・

雪ノ下「できた。。。このオムライスの作り方難しいわね。。。 流石にプロの料理人には敵わないわね」

以降何があったかは 皆さんのご想像にお任せします

因みに比企ケ谷は重役出勤して平塚に反省文を書くハメに

一方雪ノ下はと言うと遅刻せずに登校していた

だが 昨日のことで眠すぎて授業には集中出来なかった

ーーーー奉仕部ーーーー

比企ケ谷「な、なあ次からやるなら一回か次の日が休みの時にしないか？」

今日のこともあり また雪ノ下の精力に驚いた

結局遅刻した比企ケ谷は平塚に遅刻した理由なども聞かれた

そこに関しては適当にあしらった

だが比企ケ谷同様授業に集中出来ず ほぼ寝ていた

13話 人ってかなり変わってるよな

「……………」

八幡「……………」

雪ノ下「……………」

7:20分テレビではZIPがやっていた台風の事や田中いじりなど 視聴者を楽しませていた

だが一方八幡と雪ノ下はお互いに朝ごはんを見ながら沈黙している

そう食べてるから静かなんじゃないやなくて目の前にご飯が有るのに話さないのだ

八幡「まず、一つ由比ヶ浜とは喧嘩はやめてくれ、見ててこっちもヒヤヒヤする」

開幕沈黙を破ったのはは八幡だ雪ノ下の目を真っ直ぐに見て話した

雪ノ下「そ、そうね八幡と話していれば、」

少し早口になりながら話す 雪ノ下からすると真面目に考えたのか分からないが 八幡からしたらOUTだ

八幡「俺と話すのは全然構わん、だがそれは由比ヶ浜を無視するに
ならないか？それもやめてくれ」

雪ノ下「……………分かったわ ご飯も食べましょう冷めるわ」

朝ごはんを見ながら 八幡に言う

「……………」学校「……………」

校内放送「2-C比企ヶ谷 八幡君至急国語担当の平塚のところで
来るように」

八幡「まじかよ」

クラスで寝たふりをしていた八幡は今の話を聞き逃さなかった

内心どうせ奉仕部のことだと思いきつい腰を上げてゆっくり職員室
に行った

職員室

比企ヶ谷「失礼します比企ヶ谷です、平塚先生居ますか？」

平塚「来たか、少し話が有るからその座つてくれ」

平塚が言ったのは職員のリ休憩用の椅子だった

一回 断りをいれて座る

平塚「まあ、話は簡単だ奉仕部に新しい部員を入れたくてなその用で呼んだんだ、簡単だ後2週間以内に1人増やしてくれればいいそれだけの話だ」

八幡「、それは、俺は構いませんけど雪ノ下と由比ヶ浜には話したんですか？」

平塚「雪ノ下には話した由比ヶ浜は私が話してもどうせ理解できるか分からんから雪ノ下に説明を頼んでおいた、まあ簡単だろう1人増やすだけだ、一年生でも同年生でも先輩でも一向に構わない話は異常だ放課後奉仕部に行くからその時にまた詳しいことはそこで話すよ」
タバコの煙を吐きながら言う

比企ヶ谷「分かりました、では放課後奉仕部で」

比企ヶ谷の会話の後平塚は「ああ」と返事し話は終わった

——奉仕部——

雪ノ下「貴方、私の行っていることが分からないのかしら」

由比ヶ浜「分からないよ！もつとわかりやすい用に話してよ！」

扉の前でも聞こえる喧嘩に比企ヶ谷は内心呆れていた

比企ヶ谷「またしてるのか、」

ガララ、、、

比企ヶ谷「よお、あんたらまた喧嘩してるのか？雪乃」

雪ノ下「これは私は悪くないわよ由比ヶ浜さんが話を理解しないんだわ」

比企ヶ谷「まあいい 平塚先生も来るから詳しい話は平塚先生に説明してもらおう」

終わり

14話鬱病になった貴方は？

結局 全て無駄 何もかもが人の心は弱すぎる

有名な文豪の作品では友人か女を取るかで精神を病み結局自殺する
という作品があつた

今となつては納得できる 皆は同じ立場じゃ分らないと

それは否だ

これは持論だがこの人は犯罪を起こさない この人は人を殺さない
い

よく テレビの犯罪特番で言われる だが人は心に恨み嫉妬

色々な感情がある

それは長年溜まつていき最後には、、、爆発だ

簡単に言うとな人の心はただでかいダムがあるか小さいダムがある
かだ

小さいダムだとすぐに爆発する

逆に大きいダムだと多少は耐えられる だが限量が溜まれば爆

発

これがよくある 「あの人は温厚だったのに」

とかニュースのインタビューである

結局何が言いたいのか 必ずしも人が傷つかない言葉なんて無い

どんな言葉においても人は傷つく

これを見ている方にも考えて欲しいかにして人の心は弱いのか
を

そして 人と言うのはいずれ爆発し周りを巻き込んで 消える

と言うのを

奉仕部部室

奉仕部では沈黙が続いてた 理由？あの後比企ヶ谷が喧嘩を止め

座らせてるからだ

由比ヶ浜は携帯をいじりながら比企ヶ谷の顔をチラチラ見ている

雪ノ下はいつも通り本を読んでいる

(こころ)

一方比企ケ谷は空の空何もすることもない　いま考えている事は
新入部員をどうするかだ

比企ケ谷自身も友達なんているわけでもなく　ぼっちだ

由比ヶ浜に相談をしようかと思つたが、由比ヶ浜の友達をこの奉仕
部に入部させるとなると五月蠅くなる

比企ケ谷（平塚先生も来るしその時に相談してみるか）

時計の音がカチカチとなり役五分もたつたここまで来ると暇にな
由比ヶ浜なんて机に突つ伏している

沈黙を破るように　奉仕部のドアから「失礼するぞ」の音が聞こ
えた

それに反応し雪ノ下は「どうぞ」と一言言う

結局話した子よは単純明快だった　ただ新入部員の1人入れろの
事だそうさ

雪ノ下と雪ノ下は普通に話を聞いたが由比ヶ浜は　目をこす
りながら聞いていた

その後平塚先生は「じゃあな」と一言言うとすぐに帰つた
数分後

奉仕部では侵入部員をどうするか話していた

雪ノ下はチラシを配り宣伝し入ってもらおうと言つていき

由比ヶ浜は「隼人はどうかな？」言つてきただが雪ノ下の一言で由
比ヶ浜はしよんぼりして黙つてしまった

比企ケ谷「なあ、普通に自分のクラスの仲良いやつを誘つたら由
比ヶ浜の友達の隼人？　って奴は抜きにしてよ」

ひきがやの一言で雪ノ下は黙つてしまった何故なら「八幡、友達い
るの？」と言われてしまったそりやそうさ友達なんかいないんだから

結局話はまとまらず明日放課後にもう一回意見の交換をしようと
雪ノ下は言つた

続く

15 雨の音

雨 地球だけでしか起きない気象現象

私は雨が好きだ 雨の音 雨の匂い 地面の湿り方 雨が浸った道を歩く音

全てにおいて雨が好きだ あめの日に見る小説は一番集中できる

そう比企ヶ谷もそうだ雨の日には良く家で読書をする

放課後新入部員を入れる話で結局話は纏まったが結果は

最近 由比ヶ浜と仲がいい 戸塚 という同じクラスの方を入れると言う話だった

雪ノ下は葉山以外なら特に希望は無かったらしく比企ヶ谷自身も葉山周りのうるさい奴等以外なら全然大丈夫だった 戸塚がどんなやつか聞いたら由比ヶ浜からいい話を聞いた

由比ヶ浜「うーんとね、何かね女子みたいな人だよ！本人も承諾してしてくれたらしい人だと思うよ！」

と言っていた、いい人ね

まあ放課後顔合わせするしその時にどんな人か見よう、、、

放課後

比企ヶ谷「それで、戸塚はいつになったらここに来るんだ」

もう学校での授業が終わってかなりの時間が経つ なんなら先生も来ない来るって話だったんだけど、

正直、来る来ない話は別に気にしてないただ来るって話なのに来ないとなんかむずむずする。

今やることなんて読書位だし雪ノ下の紅茶がいい感じに今の雰囲気気にマッチしていて心地よい

お、ここで「スターバーストストリーム」かかっこないな、てかいいな仮想世界に閉じ込められてデスゲームでもしたいもんだ、

ガラガラ

??? 「失礼します。遅くなっつてすいません、部活が終わらなく

て、」

比企ケ谷が後少しで小説に引き込まれる直前に柔らかい声と共に奉仕部の部室のドアが開いた

比企ケ谷「いや、大丈夫だ、少し待っていてくれ、先生を呼んでくるうん、女子かな、由比ヶ浜が言うにはもつと男成分があると思っただがこれはかなり女子だな？

てか女子だな、なんか戸塚のかおの周りキラキラしてたぞ、、初めて見たな、

平塚「いやー待たせたなすまんすまん、おつとノックしておかないとな」

そうこの方部室に入る時100%でノックをしないのだ雪ノ下は実際かなり気にしてたらしく毎回平塚先生にノックをしてくれと話すが毎回はぐらかせられまともな返信が来ない

比企ケ谷(あの人はまともなマナーができないのか、正直ポンコツみたいな感じがする、うーん)

雪ノ下「では先生も来たところですし話を進めましょうか、戸塚君、一応部活の活動内容は由比ヶ浜さんから説明されたかしら？」

戸塚「えーと、説明はされましたけど、お悩み相談室だよ、言われて、いまいち」

少し上目遣いで雪ノ下に話す

まあそうだろうあの由比ヶ浜だ普通に考えてまともな説明なんてしてないと思った

雪ノ下の顔を見ると、そんなことだろうみたいな顔をしながら顔に手を当てていた

雪ノ下「だろうと思っていたわ、ここでもう一回再認識を含めた奉仕部の活動内容を話すわ」

比企ケ谷(だろうな、実際俺もそうだとは思っていたわ、まあ雪乃が説明するなら良いや、任せよう)

終わり 次回へ続く

16話 人とは

やあ、おはよう皆さん中の人だ

今回の話は人間関係だ生きていれば必ずある悩み事

よく相談がきます「この方が友達に悪口を言つてて学校では普通に話しているんですけど少し話し辛くてどうすればいいですか？」と良くなる質問だ、この相談は大変難しい、大抵の人は友達に「○○さん前悪口言つてた？」とストレートに聞くやり方良く聞かれません）あるいは先うなやり方は好まない（なんか上から目線ですいません）あるいは先生に相談するか、、だ　まあ前者も後者も駄目だな　まず前者これは説明しなくてもいいと思う、だが話の内容になるが悪口言う奴は大体関わらない方がいい、理由なんて簡単その悪口を見て「私しも、言おうかな」って方が出るからだ、私が中高生の時はこの類が多かった、自殺した方も居た、しかもその方は悪口なんて言ったことない人だった、悪口とは人を通して誇張されていくから、悪口を聞きたい奴はその方から信用されてると思うからだ、それで話に火がついて悪口が伝染する、

私が一番思う簡単なやり方は逃げるんだよ、その環境、その状況、別に逃げる事は悪くないだつて逃げないで心が辛くなつたら意味がないだろ、逃げるのが一番、そのあとは先のことを学び仲良く信頼できる人を探ること、そのような人を探すやり方は、昔から連絡が途切れない方だ、中高生で沢山友達居たが今では15人ぐらいしか仲いい奴は居ない正直、そんなもんよ。心から仲いい奴は1人でも居れば心の拠り所ができる。

その環境から逃げて遠い場所誰も知らない場所で関係を築くのもいいと思う。

もしこの話を見て、少しでも気が楽になったら幸いです。

では 本編どうぞ

雪ノ下「では、奉仕部の活動内容を話そうかと思うわ、」

比企ヶ谷「ちよとまで」

うーん絶対話が長くなる、雪の下の顔を見てみる、、なんかお預

けを喰らった顔してるぞ、かわいい i

じゃない、あの状態で雪ノ下に話させたら、余裕で30分位話すぞ
比企ヶ谷「俺が説明する、簡単に説明するぞ、要は依頼者の相談内容を奉仕部で相談を受けてどのような解決も主にしたのが、奉仕部だ」

まあこんなもんかね、だって今の簡単な説明で分かるよね、
分かって欲しい、由比ヶ浜よりかは頭良さそうだし分かるよな

戸塚「あ、有難う、要はお悩み相談室みたいかな？」

おお分かってくれた、お悩み相談室か、、、笑

まあ、当たらず、遠からずだな、、、いや当たりだな笑

てーか相談内容なんて全く無いな、まあ入ったの最近だしなしよう
がなしと

ゴゴゴゴゴゴ

雪ノ下「八幡、なぜ私が説明するの貴方が説明してるのかしら、
？」

やらかした、まあいいや適当に説明しようかな、

比企ヶ谷「まあ、話が長くなるからだな、この時間も勿体無いしな、
だって今日から活動するんだろ？ここで時間を消費するのは無駄
だ」

まあこんなもんだろ、取り敢えず、相談者が来ない時にでも雪ノ下
を宥めておこう

平塚「では、私から相談者がいる、初めての活動だ、ちゃんと話を
聞くんだぞ」

続く

17話 人の表情は様々なものが見える

表情 それは生き物の考え 思考 などが読み取れる程感じれるもの

私は最近、Twitterで面白いものを見ました今から描くものは不快感がおるかもしれません

そのため閲覧注意です

その絵は 女性があぐらを組んでタバコを吸っている絵だったんですがその人の服装は全裸で灰皿には使用済みのコンドームがありました

首には女子高生のリボンをつけてました、この写真を見て、ここ最近で凄いなと思いました。表情はなんとも言えない表情をしていて本当の愛の行為なのか援交などなのか全然分からなかったです。本当に衝撃でしたこの絵を見て表情の大切さがありました

もしこれが涙を垂らしていたらもつと違う意味だったかもしれない最愛のパートナーとの初夜での嬉か気を紛れたいのか、此れでも意味が大体変わってきますよね、じゃ此れが笑みだったら、もつと意味が違うことになるでしょう

ただの嬉と、何が言いたいかと言いたいのかは 人は表情ひとつで全然捉え方が違うということです

日常生活でも今の話は同等だと思えます、表情ひとつで人間関係が簡単になる等全然違うと思えます。

まあ簡単に言うとかれ文を見てる方にも人の表情に注目してみてください、かなり生活が変わると思えます。

それと今回は私の話になると思いますが、話が変わりますがテレビ入試の放送されました、うーんとはなしの導入が下手ですがいいですね、今回は受験勉強の仕方を教えたいと思います、私の中学生の時はYouTubeで雨の音を聞きながら勉強をしてました、また雨が降っている時等もよく勉強をしていました、まだ受験が終わってない方は雨の日などに勉強してみても如何ですか

「失礼するよ、平塚先生に相談したいことはここに相談してみろと言われてね」

そう平塚先生が相談者とは、比企ヶ谷、雪ノ下が嫌っている 葉山 だった

(比企ヶ谷)なんでこいつなんだよ、、俺が一番嫌いなのにまだ由比ヶ浜みたい馬鹿相手した方がいいわ、てかこいつ顔はいいんだから、悩み事なんてないだろ、自分で解決してもらいたいわ、てか帰ろよ、そんな話聞いてないとか、言って帰ってくれないものかね

雪ノ下(なんでこの人が相談者なのかしら、人間関係もいいんだから、自分で解決してもらいたいわね、まあ平塚先生からの頼みごとだし無碍にはできないし、話でも聞いてあげようかしら

どちらも葉山に対していい感情は持ってなかった、なんなら比企ヶ谷は葉山に嘘をついてまで帰ってほしい感情を持っていた

逆に由比ヶ浜は

由比ヶ浜「隼人くん!!何か相談ごと? 私達なら全然話を聞くよ! 相談内容も誰にも話さなし」

葉山「ああ、相談内容は秘密に頼むよ、それで相談内容は、、」
続く、、、、、、

18話　なんか自分だけ違うとか言ってるけど、貴方浮いてるよ

葉山「相談内容は俺に仲良い友達がいるんだけど、なんか最近その友達同士が仲悪いんだよね、どうしたらいいか相談に乗って欲しくてね、」微笑みながら比企谷を見て話す

一方比企谷は「こつち見んなよお前俺の名前知らないだろ、最初話した時「ヒキタニ」とか言ってたし、お前絶対フルネーム知らないだろ、」と心の中で嫌味たらしく思っていた

一方雪の下は眉間にシワを寄せながら目を瞑っていた、
由比ヶ浜は黙って聞いていた

雪ノ下「相談内容は分かったわ、でも、」

雪ノ下の会話を塞ぐように比企ヶ谷が話す

比企谷「友達がどんな奴か分からないから、相談されても適格な返答ができないと言うことだな」

まさか此処で比企ヶ谷に言われるとは思ってなく、少し比企ヶ谷の方を見て般若のような形相で「ええ、そうよ」

と言う、実際聞いたところで雪ノ下の返答は大方予想つくからその返答のやり方だと、葉山は絶対しなさそうだと比企谷はさきを読んでいた

葉山「、、、どんな奴か、、皆んな仲良くていい奴だよ」

と言った、今の言葉に雪の下はため息を吐きながら話す

雪ノ下「なら相談の返答は簡単よ、貴方の友達と言う人に誰が嫌いか聞いてみたらいいか？その後は自分で考えなさい、葉山君」

雪ノ下（この人舐めてるのかしら、どんな人が聞いたのに友だち数人を一緒だと含めて話したわ、この人からしたら、皆んなそんなものかしら、哀れね、、、）

葉山「そ、そうか！結衣はどう思う？」

由比ヶ浜「うーん私は少し、大和君達だけにしてみたら？その方が

なんか話しやすいじゃないかな」

比企谷（由比ヶ浜からこんな具体的な返答が出来るとは、でもダメなんだよな、多分せいづらは葉山の友達の友達だから話さないんだろう）顔には出さず考える比企ヶ谷、雪ノ下も同様の考えをその前からしていた、それを言わなかったのも別にそこ迄しなくても時間が解決するだろうと思っていたから、、、

葉山「そうか、、、ありがとう、ちよつと皆んなの話でも聞いてみるよ」

といいつつと微笑みながら、奉仕部のドアを閉めた、

比企谷（あいつ絶対出た瞬間真顔になっつているだろ、ちよつと笑えてきた）

その後は相談も終わり、特にやることも無く比企ヶ谷は小右折を見ながら、

雪ノ下も読書をしながら、一方由比ヶ浜はスマホを触りながら笑っていた。

下校時間になり解散した

比企谷「雪乃、先に校門前で待っていてくれないか？」

雪ノ下は頭の上に？が付きそうなかおをしながら「ええ、分かったわ」と言っ先歩いて行った

比企谷（さて行くかな、、、、、、）

続く